

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和5年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第5号（8月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpjn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：[nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)



## 農薬の安全使用に努めましょう

### 農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)  
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

## 農薬ラベルを確認しましょう

## 農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

令和5年度 病虫害発生予報 第5号

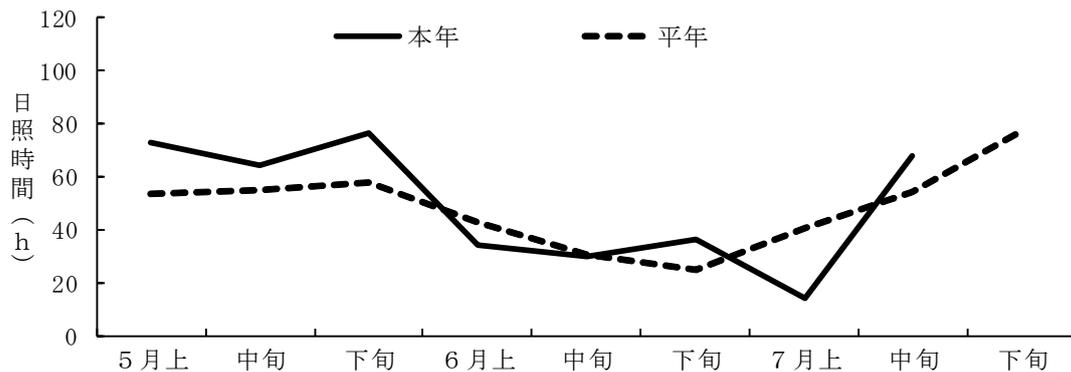
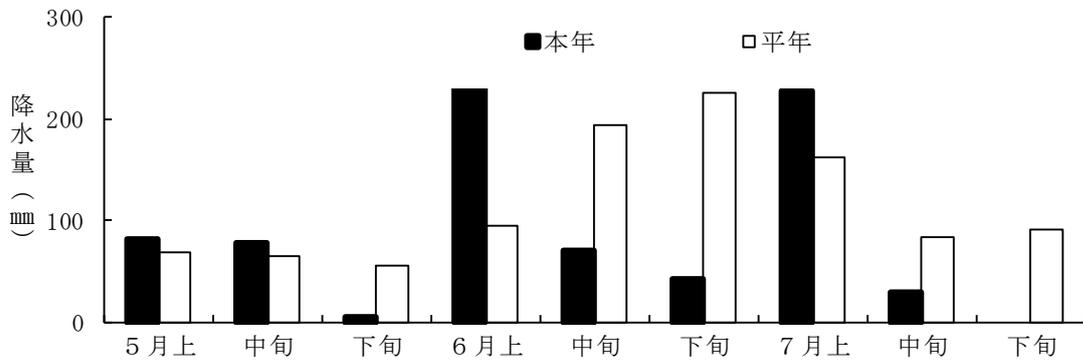
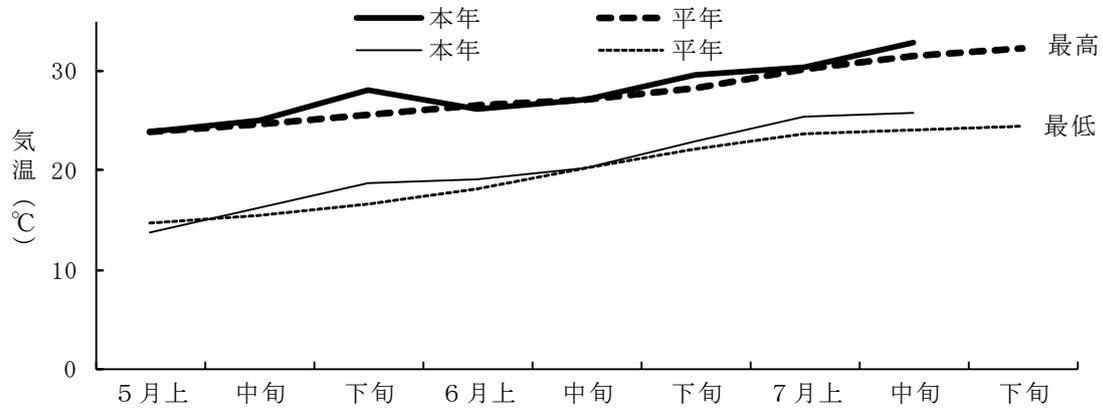
令和5年7月27日  
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（7月22日から8月21日） 令和5年7月20日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	30	60	九州南部，奄美地方とも，気温は高く，降水量，日照時間はほぼ平年並みの見込み
	奄美地方	10	20	70	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	30	30	
日照時間	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	30	30	40	

II. 5～7月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



### 【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稲	いもち病	やや少	やや少
		紋枯病	並	並
		トビイロウンカ	やや少	やや少
		コブノメイガ	やや少	やや少
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床）	うどんこ病	多	多
		炭疽病	やや少	並
		ハダニ類	並	並
	サトイモ	疫病	少	やや少
		ハスモンヨトウ	多	多
花き	キク	ハダニ類（県本土施設）	並	並
		アザミウマ類（県本土施設）	やや多	やや多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		黒点病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
茶樹	チャ	炭疽病	多	多
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	並	並
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	やや少	並
		チャハマキ	並	やや多
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ	並	やや多
		カンザワハダニ	並	やや多

## 【 病 害 虫 発 生 予 報 】

### I. 普通作物

#### 1. 普通期水稲

##### (1) いもち病

###### ア 予報内容

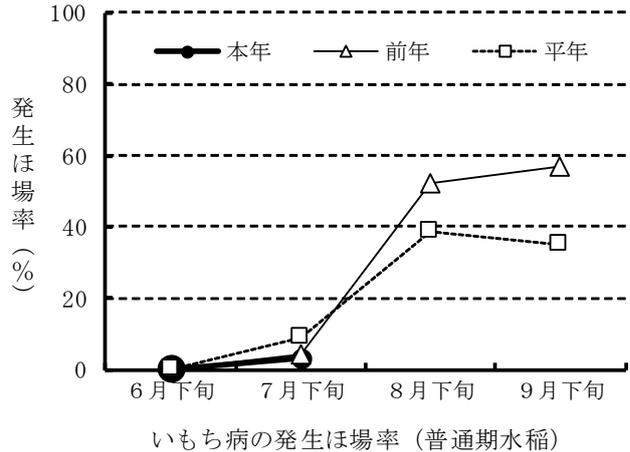
- (ア) 発生地域 県内全域  
 (イ) 発生量 葉いもち：やや少  
 穂いもち：やや少

###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
 発生ほ場率 3% (平年 9%)  
 : やや低い(-)

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 上位葉への発生が認められる場合は、粉剤または液剤で早急に防除を行う。  
 (イ) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。  
 (ウ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。常発地や葉色が濃いほ場では、穂肥の施用は控える。



##### (2) 紋枯病

###### ア 予報内容

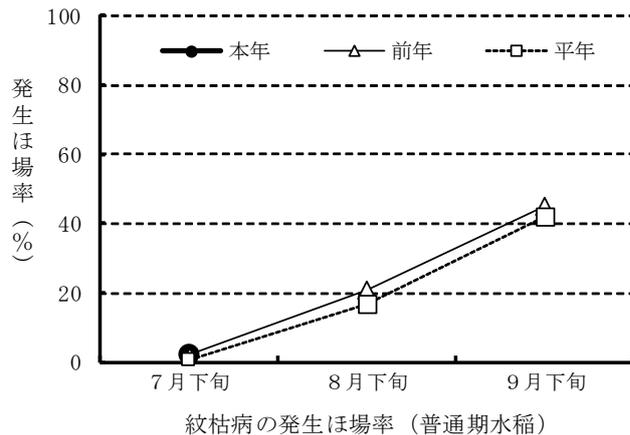
- (ア) 発生地域 県内全域  
 (イ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
 発生ほ場率 2% (平年 1%) : 並  
 (イ) 気象予報  
 気温：高い (+)

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 早生種では出穂前1週間～出穂期、  
 中晩生種では出穂前1～2週間の防除に重点を置く。  
 (イ) 窒素質肥料の多施用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。  
 (ウ) 紋枯病が発生している水田では、出穂後も病斑の進展に注意する。



(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや少

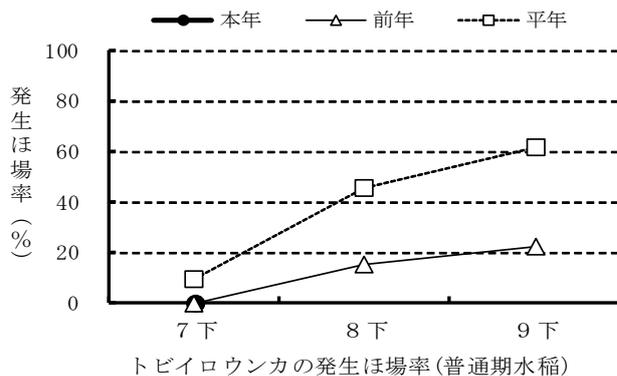
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率 0% (平年 9%)  
：やや低い (-)

60W水田予察灯での6月1日～7月25日  
の誘殺虫数3頭(平年63.2頭)：少(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 飼料用稲などの育苗箱施用剤を使用していない水田，あるいは，ウンカ類に効果が高いトリフルメゾピリム剤以外の育苗箱施用剤を用いている水田では，本虫の生息密度が上昇する可能性があるため，発生に注意する。
- (イ) 防除適期は7月2日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月15～19日，7月9日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月22～8月26日と予想される(表1，図1)。
- (ウ) 本虫は稲の株元に生息するので，粉剤や液剤で防除する場合は，薬剤が株元に十分届くように散布する。



(4) コブノメイガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率 6% (平年 21%)  
：やや低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 7月10日の飛来に由来する第1世代成虫の発蛾最盛日は8月10日頃と予測される(表1，図1)。粒剤による防除は発蛾最盛日，粉剤または液剤による防除は発蛾最盛日の3日後と10日後に行う。
- (イ) 止葉を含む上位3葉への被害は収量・品質に影響するので，今後の蛾の発生が多い場合は，第2世代幼虫を対象に防除を行う。

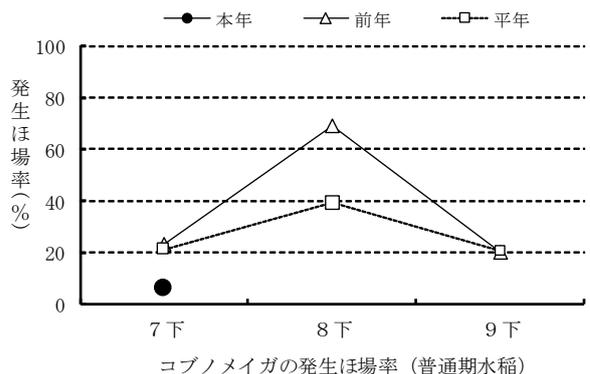
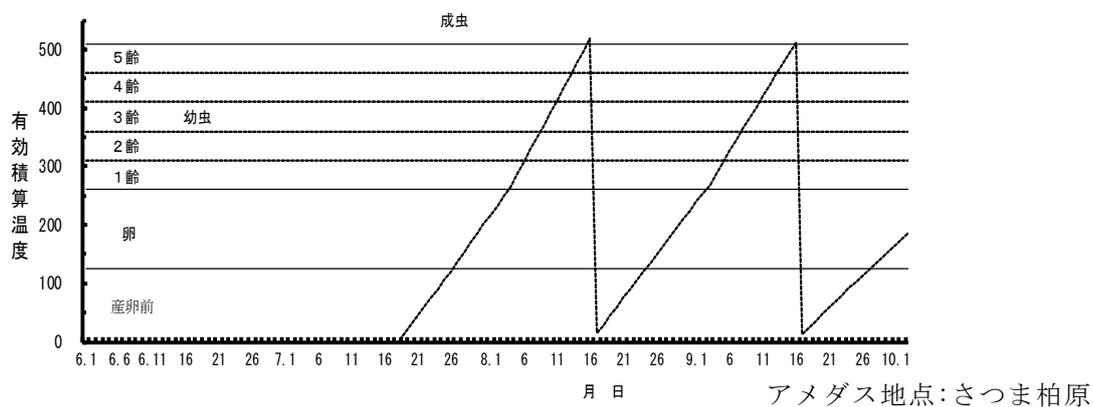
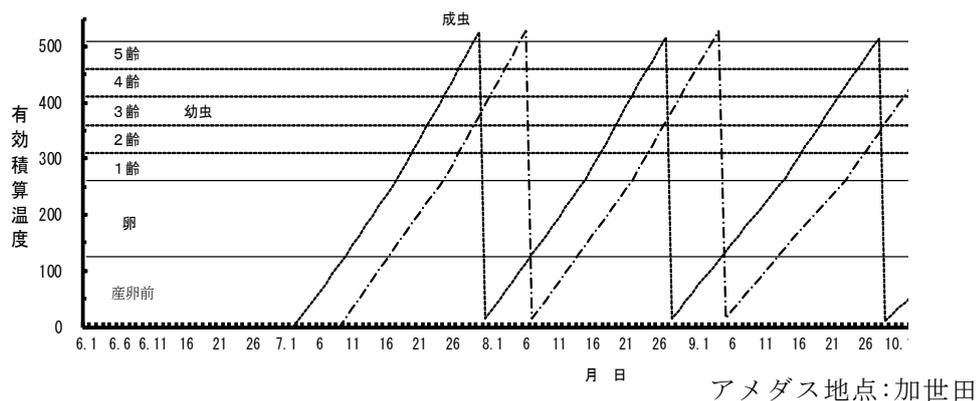


表1 予察灯等におけるウンカ類及びコブノメイガの誘殺状況

日付	60W予察灯(水田)						ジョンソントラップ			フェロモン
	南さつま市			さつま町			南さつま市			
	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメトビ ウンカ	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメトビ ウンカ	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメトビ ウンカ	コブノ メイガ
6/1	0	0	0				0	0	0	0
6/2	0	0	0				0	0	3	0
6/3	0	0	0				0	0	0	0
6/4	0	0	0				0	0	0	0
6/5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/6	0	0	0				0	0	0	0
6/7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/8	11	0	0				7	0	1	0
6/9	56	0	0	0	0	0	2	0	0	0
6/10	12	0	0				3	0	0	0
6/11	18	0	0				0	0	0	0
6/12	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/13	0	0	0				0	0	0	0
6/14	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0
6/15	0	0	0				0	0	0	0
6/16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/17	0	0	0				0	0	0	0
6/18	0	0	0				0	0	0	0
6/19	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
6/20	0	0	0				0	0	0	0
6/21	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/22	6	0	0				0	0	0	0
6/23	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0
6/24	0	0	0				0	0	0	0
6/25	4	0	0				0	0	0	0
6/26	0	0	0	2	22	5	0	0	0	0
6/27	1	0	0				0	0	0	0
6/28	1	0	1	0	10	1	0	0	0	0
6/29	0	0	0				0	0	1	0
6/30	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0
6月計	123	0	1	3	41	10	12	0	5	0
7/1	8	0	1				0	0	0	0
7/2	4	1	0				3	0	0	0
7/3	67	0	4	54	1	0	11	0	3	1
7/4	237	0	12				11	0	3	0
7/5	32	0	1	機器故障のため欠測			8	0	3	0
7/6	43	0	4				5	0	1	0
7/7	0	0	0	機器故障のため欠測			3	0	0	0
7/8	0	0	0				0	0	0	0
7/9	8	1	0				0	0	0	1
7/10	2	1	0	機器故障のため欠測			1	0	0	3
7/11	0	0	0				0	0	0	4
7/12	0	0	0	18	3	1	0	0	0	3
7/13	0	0	0				1	0	1	4
7/14	0	0	0	0	11	0	1	0	0	1
7/15	0	0	0				0	0	0	0
7/16	0	0	0				0	0	0	1
7/17	0	0	0				0	0	0	0
7/18	0	0	0	0	32	0	0	0	0	0
7/19	0	0	0				0	0	0	0
7/20	0	0	0				0	0	0	0
7/21	0	0	0				0	0	0	6
7/22	0	0	0				0	0	0	1
7/23	0	0	0				0	0	2	0
7/24	0	0	0				0	0	0	0
7/25	0	0	0				0	1	1	4
7/26										
7/27										
7/28										
7/29										
7/30										
7/31										
7月計	401	3	22	72	47	1	44	0	11	18
6~7月計	524	3	23	75	88	11	56	0	16	18

## 1. トビイロウンカ



## 2. コブノメイガ

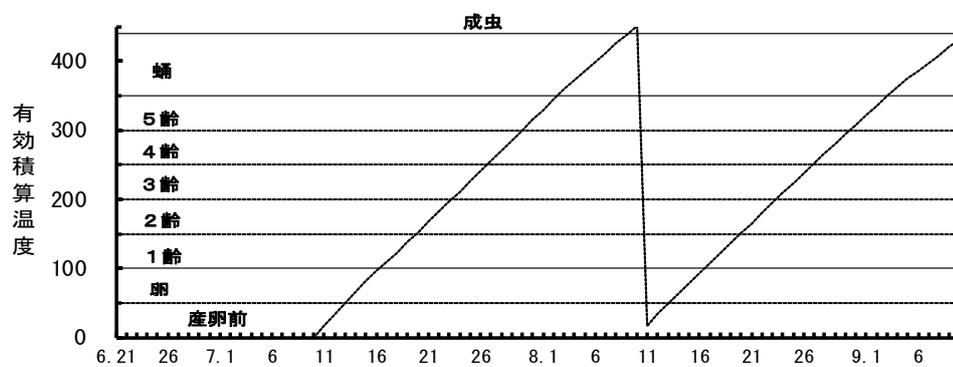


図1 トビイロウンカ、コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、加世田およびさつま柏原のアメダスポイントデータを利用した  
(7/20まで実測値、それ以降は平年値)

なお、気温の低い地域では予測より2～4日程度遅くなる。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

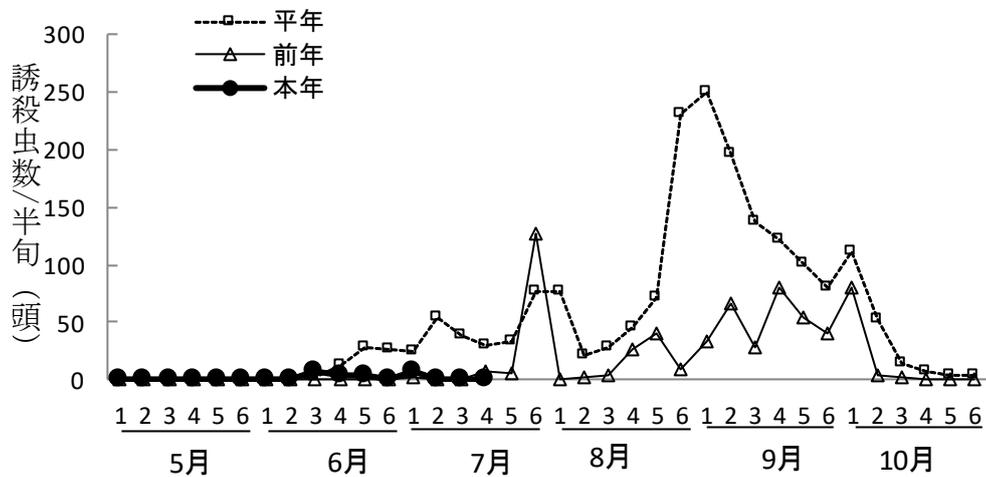
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率20%（平年41%）：やや低い（-）  
糖蜜トラップでの誘殺虫数（7月上中旬8頭（平年148頭））：少（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。
- (イ) 薬剤散布後も幼虫の発生量が多い場合は、2～3週間後に追加防除を行う。
- (ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、防除時期を逸しないよう注意する。



糖蜜トラップでのナカジロシタバの誘殺状況

調査場所：農業開発総合センター大隅支場（鹿屋市串良町細山田）

## II. 野 菜

### 1. イチゴ（苗床：子苗）

#### (1) うどんこ病

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場率50%（平年15%）  
：高い（+）

##### (イ) 気象予報

気温：高い（-）

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

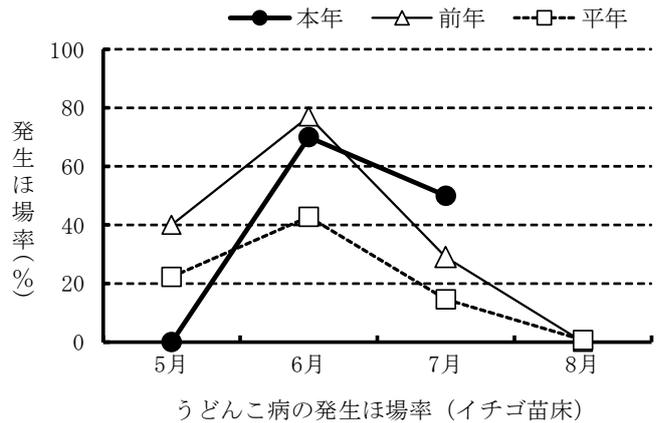
(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬剤が十分かかるよう散布する。

(オ) 薬剤によっては耐性菌の発生が懸念されているので、散布後は防除効果を確認する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、系統や作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



#### (2) 炭疽病

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率0%（平年10%）  
：やや低い（-）

ランナーでの発生ほ場率30%

##### (イ) 気象予報

気温：高い（+）

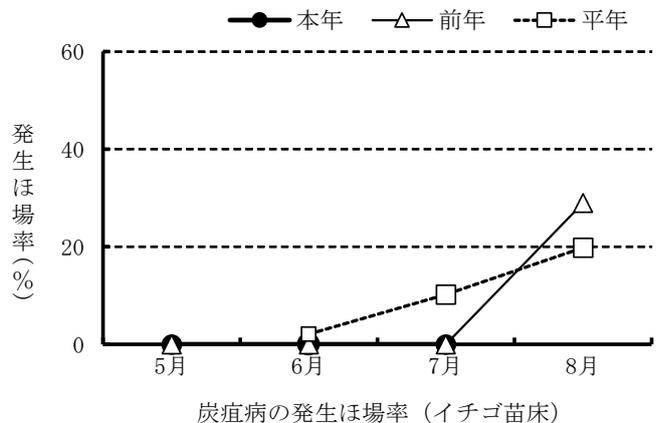
##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 苗は十分な間隔を置いて並べ通風を図り、過湿とならないように適切な水管理に努める。

(イ) 生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。また、それらに隣接している株についても併せて処分する。

(ウ) 薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20%（平年22%）：並

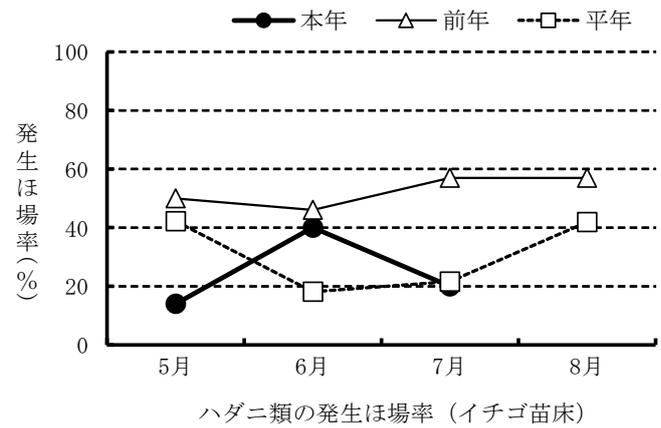
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する（令和4年度技術情報第9号（11月29日付け）参照）。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

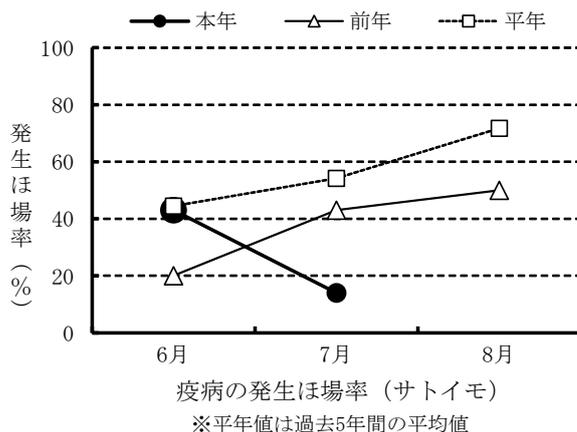
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少  
発生ほ場率 14%（平年54%）：低い（-）
- (イ) 気象予報  
気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため、ほ場周辺をよく見回り、早期発見に努める。
- (イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、発生を確認したら直ちに治療効果のある薬剤を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。
- (ウ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。



(2) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

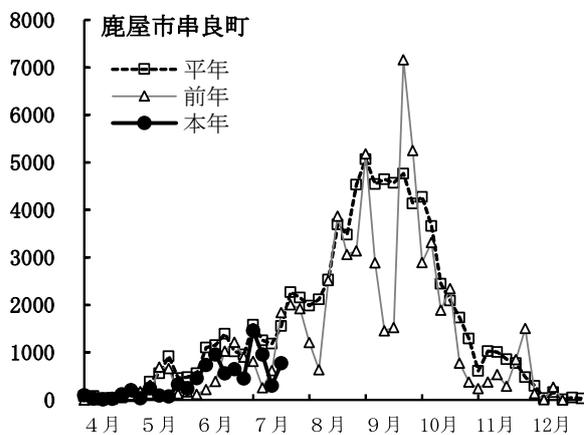
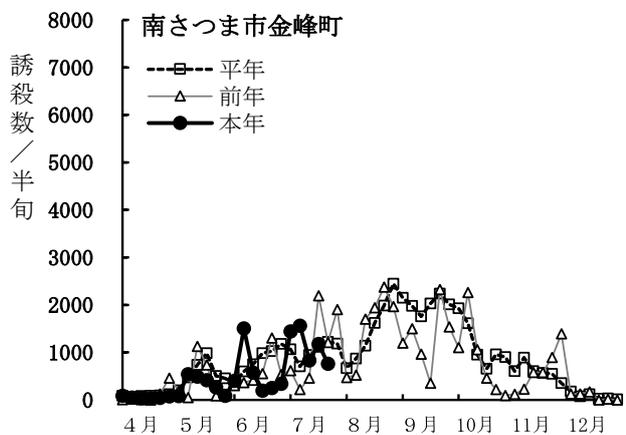
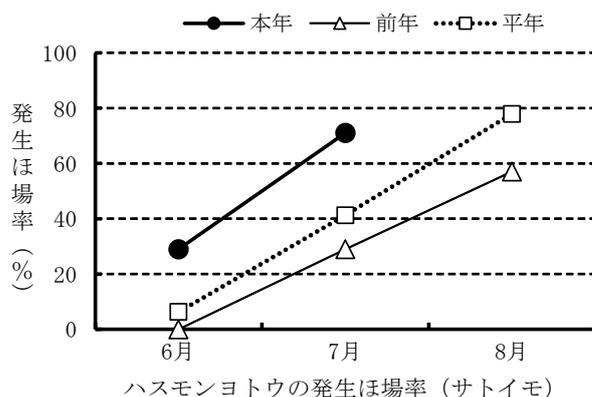
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 多  
発生ほ場率71%（平年39%）：高い（+）  
7月中旬のフェロモントラップ誘殺数：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生の目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



### Ⅲ. 花き（キク）

#### (1) ハダニ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率50%（平年44%）：並

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等で

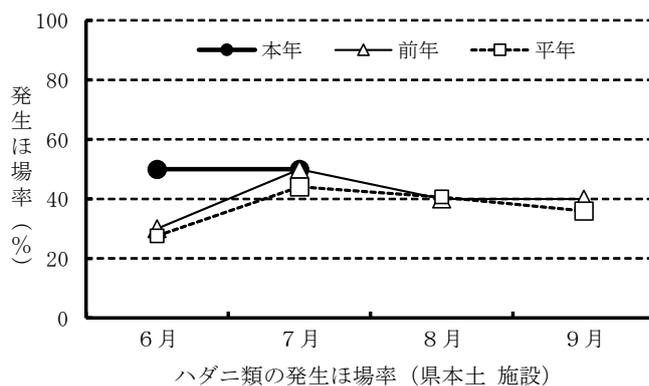
スポット状に発生する場合が多いので、

ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残渣等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



#### (2) アザミウマ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 やや多

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率50%（平年36%）

：やや高い（+）

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および早期防除に努める。

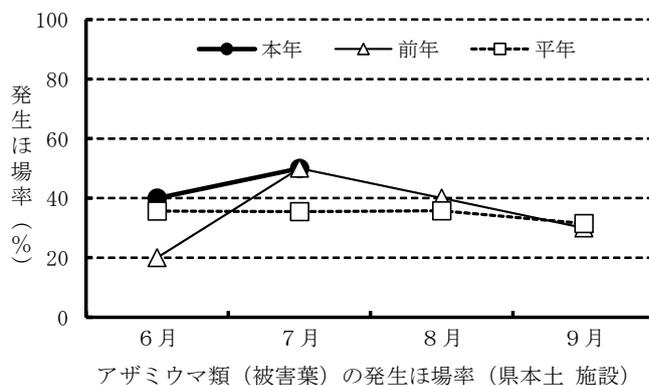
(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生に注意する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(オ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(カ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。



#### IV. 果 樹

##### 1. カンキツ

###### (1) かいよう病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

###### (イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

奄美地域(果実) 並

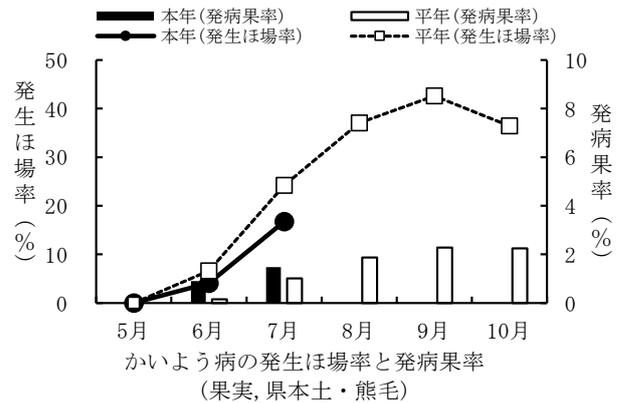
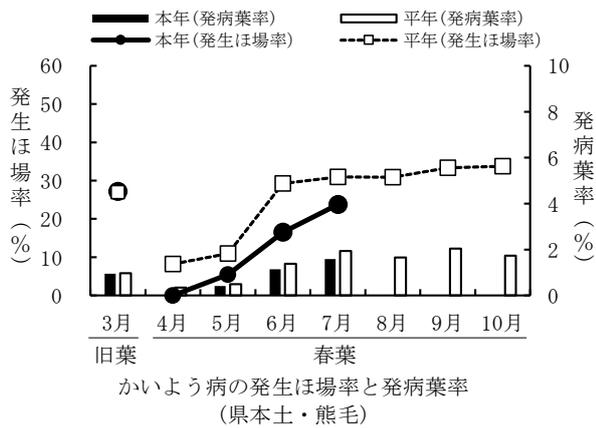
###### イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

###### (ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	24% (平年 31%) : やや低い (-)	17% (平年 24%) : やや低い (-)
発病率	1.6% (平年1.9%) : 並	1.5% (平年1.0%) : やや高い (+)

ミカンハモグリガの発生ほ場率61% (平年73%) : やや低い (-)



<奄美地域>

###### (ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 11%) : やや低い (-)	14% (平年 14%) : 並
発病率	0% (平年0.2%) : やや低い (-)	0.1% (平年0.4%) : 並

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が多くなることが予想されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 10% (平年 23%)

: やや低い (-)

発病果率 0.1% (平年 2.9%)

: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

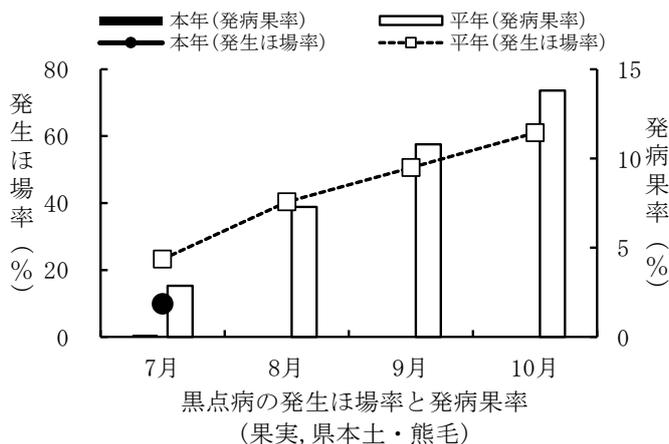
発生ほ場率 0% (平年 1%) : 並

発病果率 0% (平年 0.01%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次回の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 17% (平年 24%) : やや低い (-)

寄生葉率 2.2% (平年 5.0%) : やや低い (-)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：やや少

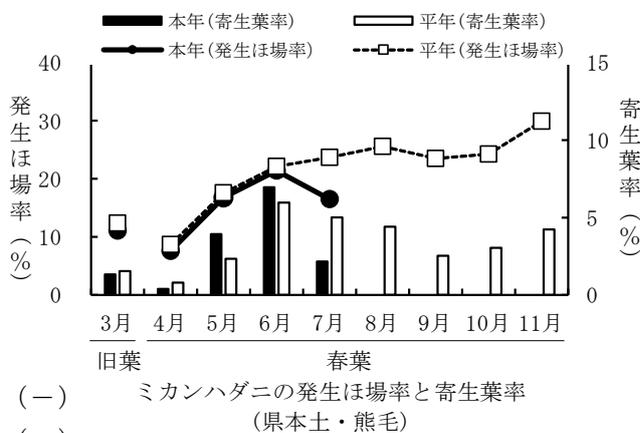
発生ほ場率 0% (平年 4%) : やや低い (-)

寄生葉率 0% (平年 0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%)を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



防除に関する今月の留意事項

1. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシ)

ア 予察灯での誘殺虫数は、平年に比べてやや少～並であった (表1, 図1)。各予察灯での最新の誘殺虫数はホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>) を参照。

イ 餌植物 (ヒノキ) 球果の吸汁痕数 (口針鞘数) は、7月前期で0.7本/果と平年並みであった (表2)。ヒノキ球果の加害が進むと口針鞘数が増加し、餌として適さなくなると餌植物から離脱し果樹園等へ飛来する恐れがある。

ウ 果実が吸汁被害を受けると、カンキツでは果汁が抜けてスポンジ状となったり落果する。ナシでは奇形果や果汁が抜けてスポンジ状となる。飛来を認めたら直ちに防除を行う。

エ 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。

表1 予察灯の誘殺虫数, 7月第1～4半旬の合計 (単位: 頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ		チャバネアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	66	269	25	505
いちき串木野市湊町	3	56	8	94
出水市美原町	7	745	19	1,897
鹿屋市串良町	8	53	2	23
誘殺虫数	やや少～並		やや少～並	

注1) 平年は、2013年～2022年の10年間の平均。

注2) 予察灯の光源は、南さつま市金峰町は水銀灯100W, 鹿屋市串良町は捕虫灯20W, 他は捕虫灯40W。

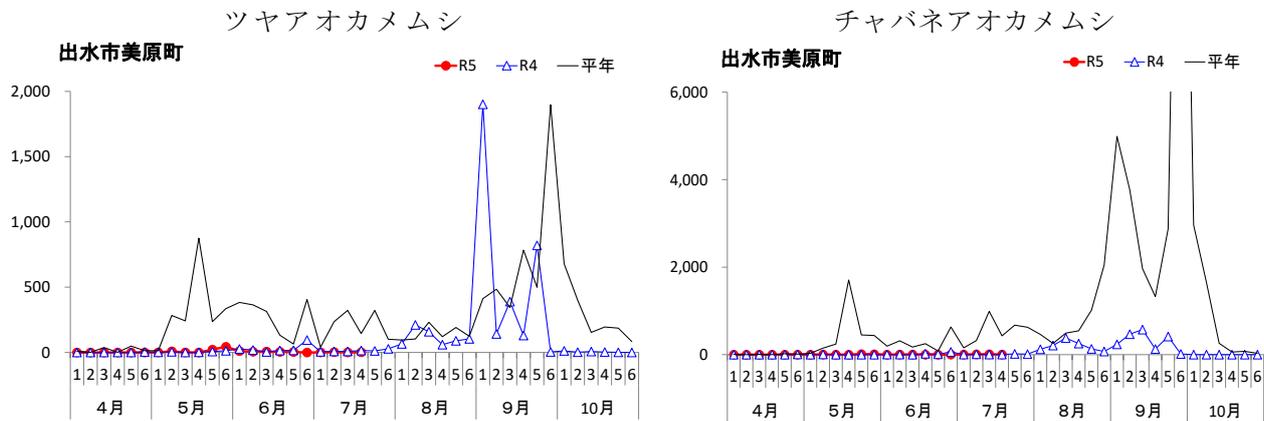


図1 出水市美原町の予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

表2 ヒノキ球果の吸汁痕数 (口針鞘数) の推移 (単位: 本/果)

	7月		8月		9月	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
本年	0.7 : 並					
平年	0.4	2.8	6.9	10.8	15.7	18.9

注1) ヒノキ球果の採取は、7月前期では7/10～13に県内8地点で実施。

7月前期の各地点の口針鞘数 (本/果) は、南さつま市: 0, いちき串木野市: 3.5, 阿久根市: 0, 出水市①: 1.4, 出水市②: 0.2, さつま町: 0.2, 霧島市: 0, 曾於市: 0。

注2) 平年は、2013年～2022年の10年間の平均値。

## V. 茶 樹

### (1) 炭疽病

#### ア 予報内容

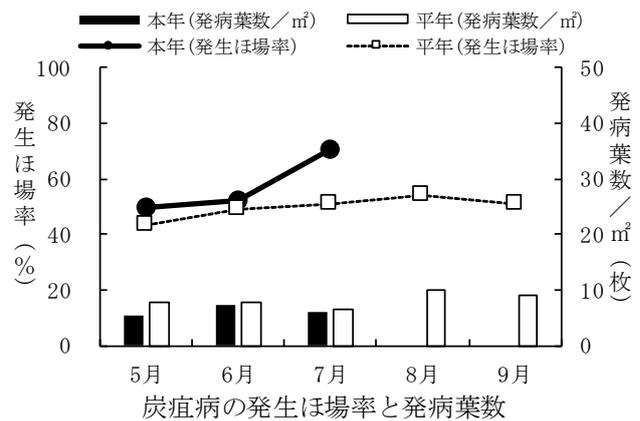
- (ア) 発生地域 県本土  
(イ) 発生量 多

#### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場70%（平常51%）：高い（+）  
1㎡当り病葉数5.9枚（平常6.5枚）：並

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生源となる病葉が少なくても，秋芽生育期に降雨が続くと発生しやすい。  
(イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤で，3～4葉期に治療効果の高い薬剤で防除する。  
(ウ) 降雨が続く，防除時期が遅れた場合は3～4葉期に予防剤と治療剤を混用して防除する。



### (2) 新梢枯死症（輪斑病菌による）

#### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
(イ) 発生量 並  
(ウ) 感染時期 秋芽生育前期（8月）  
(エ) 発生時期 秋芽生育後期

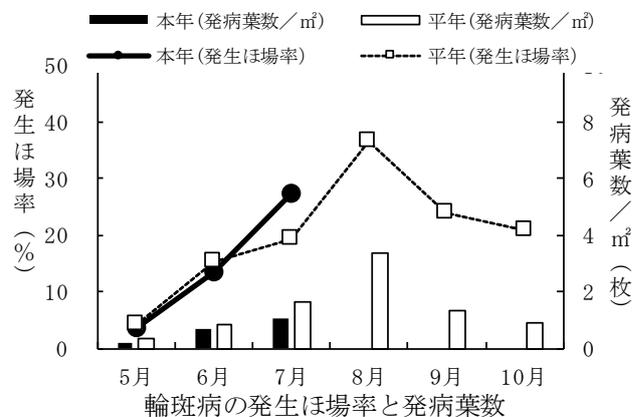
#### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量（輪斑病）：並  
発生ほ場率（輪斑病）27%（平常19%）  
：やや高い（+）

1㎡当たりの病葉数（輪斑病）1.1枚（平常1.6枚）：やや少（-）

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く，秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発する。  
(イ) 炭疽病との同時防除が可能である。



### (3) 網もち病

#### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
(イ) 発生量 やや少  
(ウ) 感染時期 秋芽生育期  
(エ) 発生時期 10月

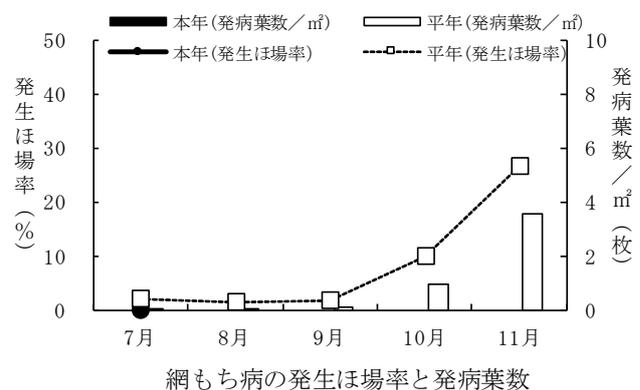
#### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率0%（平常2%）  
：やや低い（-）

1㎡当たりの病葉数0枚（平常0.05枚）：やや少（-）

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病の感染は新葉に限られ，秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。  
(イ) 炭疽病には強いが網もち病には弱い「あさのか」等の品種には注意する。  
(ウ) 更新園であっても周辺に発生源があると多発するおそれがあるので防除を行う。  
(エ) 常発園では，3～4葉期の防除に加えて，9月上旬にも銅剤等で防除する。



(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	並
	チャハマキ	やや多
(ウ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ	やや早い
	チャハマキ	やや早い

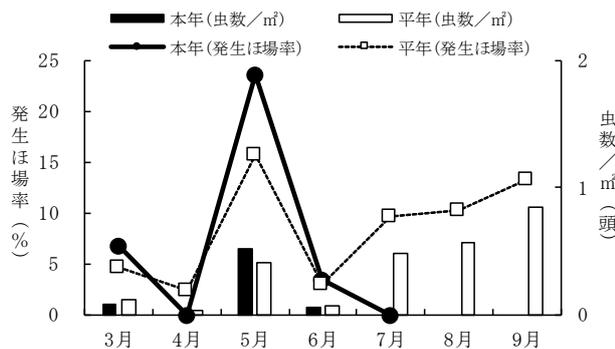
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

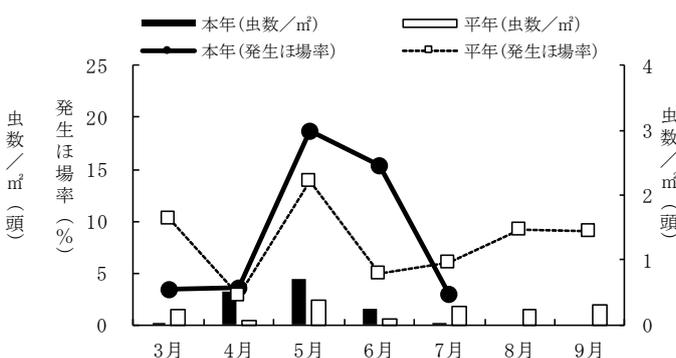
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 10%) : やや低い(-)	3% (平年 6%) : 並
虫数 (1㎡当たり)	0頭 (平年 0.5頭) : やや少(-)	0頭 (平年 0.3頭) : 並
＜南九州市知覧町フェロモントラップ＞		
誘殺数 (7月1半旬~4半旬)	760頭 (平年 125頭) : 多 (+)	114頭 (平年 46頭) : 多 (+)
第2世代の発蛾ピーク	やや早い	やや早い

ウ 防除上注意すべき事項

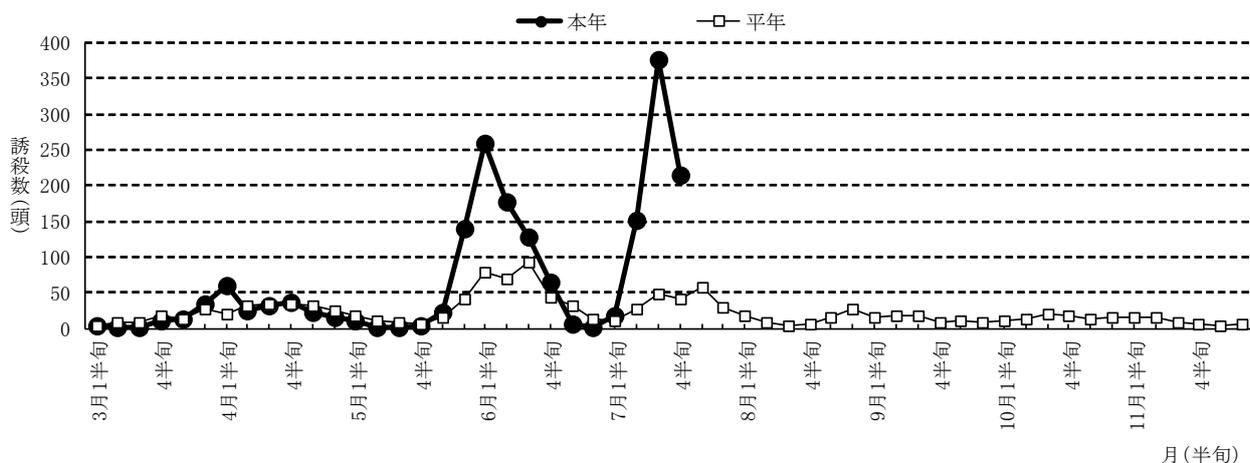
(ア) 薬剤防除を行う場合, 防除適期はふ化~2齢期 (発蛾最盛日の10~15日後) である。



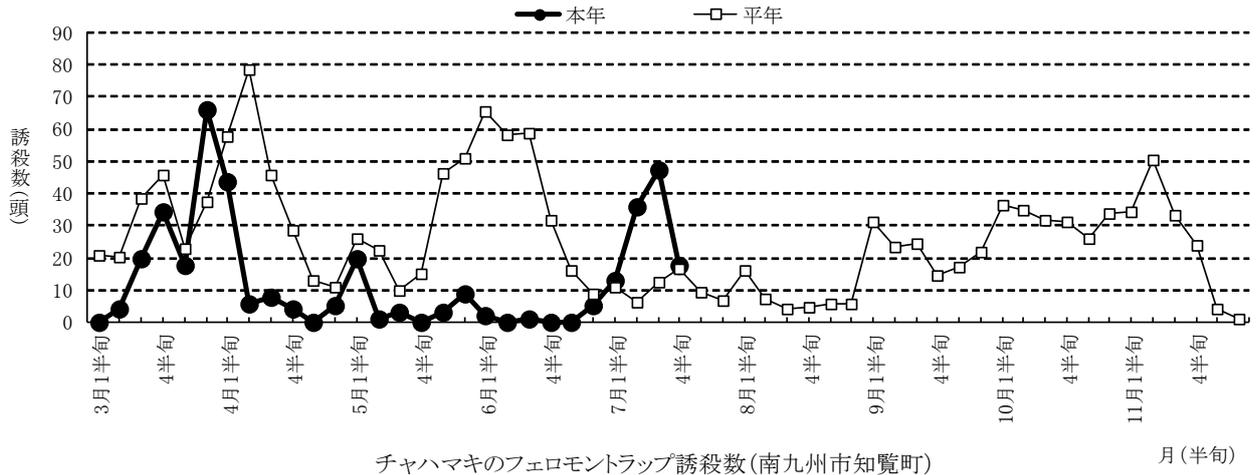
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数 (南九州市知覧町)



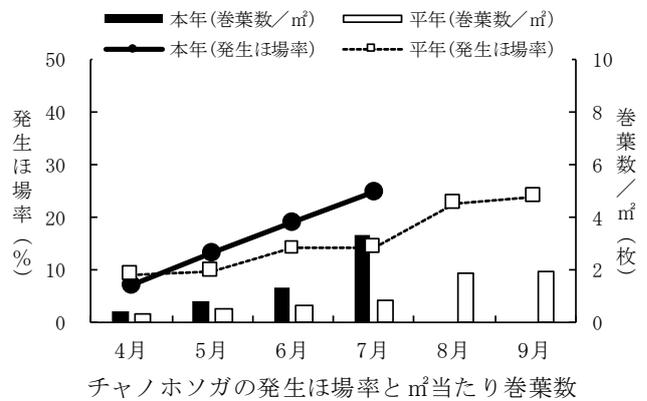
(5) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多
- (ウ) 発生時期 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
 発生ほ場率 25% (平年14%)：高い(+)  
 m<sup>2</sup>当たり巻葉数 3.3枚 (平年0.8枚)  
 : 多 (+)

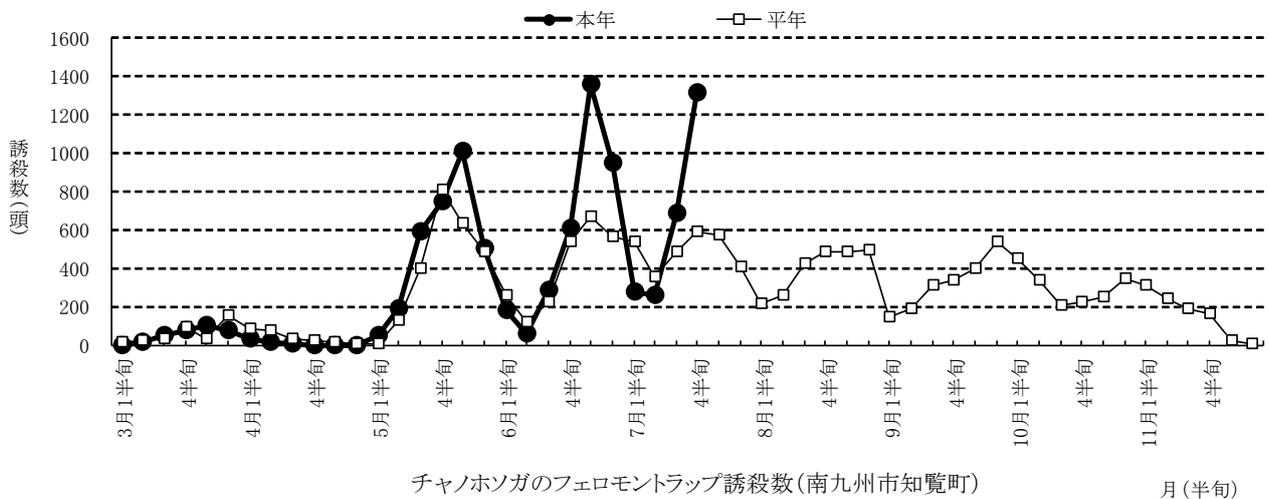


<南九州市知覧町フェロモントラップ>

誘殺数 (7月1半旬~4半旬)：2,538頭 (平年1,981頭)：やや多 (+)  
 第2世代の発蛾ピーク：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。
- (イ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(6) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
 (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多  
 チャノキイロアザミウマ やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

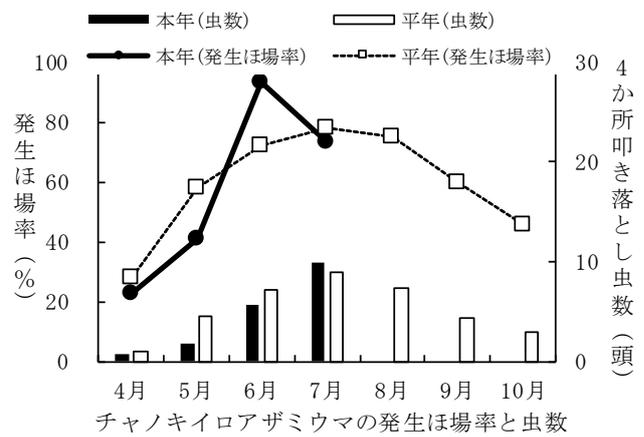
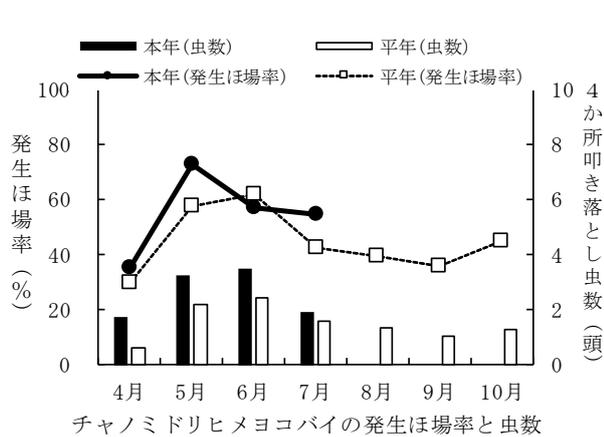
	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	やや多	並
発生ほ場率	55% (平年 42%) : やや高い(+)	73% (平年 78%) : 並
虫数(4か所叩き落とし)	1.9頭(平年1.6頭) : 多(+)	9.9頭(平年8.9頭) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいので秋芽の防除を徹底する。  
 (イ) 晴天が続くと多発する場合がありますので注意する。特に更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し樹体への影響が大きい。



(7) カンザワハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
 (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

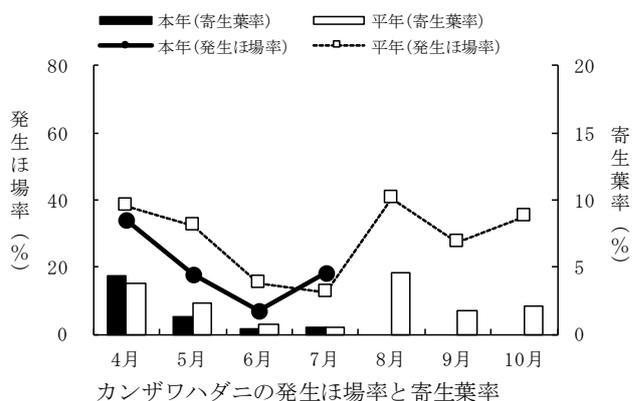
- (ア) 調査結果 発生量：並  
 発生ほ場率 18% (平年 13%)  
 : やや高い(+)  
 寄生葉率0.5% (平年0.5%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない薬剤を使用する。  
 (イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。



.....

## 防除に関する今月の留意事項

### 1. チャトゲコナジラミ

県内本土全域で発生がみられ、多発ほ場も確認されている。多発するとほ場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

薬剤防除は、若齢幼虫期の効果が高い。

- (1) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、防除の際は葉裏にかかるように10a当たり400ℓの散布量で丁寧に薬剤散布を行う。また、裾刈りは本虫の除去効果と葉裏への薬剤付着性が高まり効果的である。
- (2) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。
- (3) 更新園では裾部等に薬剤がかかりやすいため、適期に防除を行う。

## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。